

25	受験番号
中	

国語

注意事項

- 一、この問題冊子は10ページまであります。
- 二、答えは全て解答用紙に書きなさい。
- 三、この問題冊子は回収しません。持ち帰りなさい。

問題は次のページから始まります。

一

次の文章は「私」が動物園の類人猿舎（ゴリラ、チンパンジー、オランウータンのいる獣舎）を訪れた時のことを書いたものです。これを読んで、あとの質問に答えなさい。

動物園では、類人猿の係をゴリチンがかりというそうだ。ゴリラ、チンパンジーを略してゴリチンである。ユーモラスな呼びかただ。そういうユーモアは期せずして飼育者と動物との間に生れるものらしい。よき交際には健康で明るい笑いがつきもののはずである。動物園のお客さまには動物が主役である。主役が見えるばかりで、飼育係の顔など見えはしない。それでいいのだし、自分の顔もたまには見てもらいたいなどと云う飼育係は、一人もいないのだけれど、私はそこところが大切なところだと思う。私たちは直接にゴリチンと交際はできないのである。人と動物との間に交された、ユーモアと哀しみと怒りと恐怖とを経験してきた交際を聴かせてもらいたいのである。「たしかにあんたゴリラに恰好が似てきたね。歩く後ろ姿なんかゴリラの特長はつきりしているものなあ」と云われて、「そうかなあ。自分じゃ気もつかないけど、長年つきあつていつも見ているんだからなあ、似るのもうそじゃあるまい」という素直さなのである。大概の人なら、「ばかにするな！　なんでおれがゴリ公なんだ、ふざけやがって！」とどなるところを、*さもあらんと思つて肯定しているのである。

私は話を聴こうとして、ゴリチンのお邸に参上するように行きかけて、気がついてお客さんたちの顔をもう一度注意した。心を奪われて、少し笑つたなりに見惚れている人、わあ？　と何か思い考えつつ見ているらしい人、なんとか一つからかつてみたいもんだという悪ふざけのしたような人、等々であった。

飼育の人は謙遜である。謙遜というか控えめというか、とにかく動物について語るときなかなか用心ぶかいのだ。何々であるとは容易に云わない。「と思うけれど——」と云う。「ことばは通じないし生活も同じではないし、大概こ

んなところじゃあるまいかと想像する程度しかわからないんですよ」と云う。責任を逃げていてはなくて、現在の * 階梯では推察の域にとどまっているのだというのである。だから「と思う」という曖昧は、じつは正直率直な言い分なのである。それにひきかえて自分の経験については、こうだったという言いかたをする。「でしよう」とか「と思う」とか「らしい」とかいうことばが会話にかなりたくさん使われ、断定語はほとんど経験による事柄だけに使われている。つまりこの点では、ことばはかなり神経こまかく、正しく使用されているのだ。

この態度は誰かに似ているという気がした。それは学問をする人たちに似ていた。何の学問によらず何かを究めて行こうとする人たちは、「である」と「と思う」をはっきり気をつけて使う習慣がある。飼育の人は学問をするために飼育を担当する気になったのではないだろうが、熱心に飼育をしていることで自然と、「である」と「と思う」とに厳しい区別をつけて話すことになったのだろうか。私は飼育係を「である」で話す人ときめてかかっていたので、A たしなめられる思いがある。人間は動物に「である」ずくめで対えるほど、よく承知しているつもりなら不謙遜である。飼育係の「と思う」は学問する人の態度をもつて語られている。

類人猿舎に入る。すぐ、ちよつと奇妙なおいがあることに気づく。ほそい通路、——これがチンパたちの運動場と寝部屋をくぎっているのだが、通路の頭の上には透し檻の連続みたいなものがある。「チンパたちの専用の通路」だそうだ。移動させるときには、その檻を切り放せば都合がいいようにできている。

頭の上のその檻から声が降ってきた。チンパが一頭、何かの都合で寝部屋にも運動場にも出さず置かれていたので、飼育係を見て啼いたのだ。なんとも云えない哀切な声で驚いた。理解しがたいものにぶつかると、こちらは理解し

*さもあらん……それはそうだろう。

*階梯……段階。

たさにあらんかぎりの智慧をふりしぼって、ああかこうかと考えるものである。チンパの声はあまりにも意味深長で、しかも感動的に打ってきたので、私は試験のときのように目まぐるしくあれこれと思った。ところが困ったのは、こちらの思うどの思いにもあてはまる声で、つまり万能の声だ。哀しい？ そうと取れる。嬉しい？ そうだ。空腹？ そうだ。寂しい？ ああ寂しいんだよ、——これじゃかなわない。まるきりわからないのと同じだ。なるほど、「と思う」である。それでこちらにも気が沈んで、二夕心なくチンパの啼く*ゆえんを考えていると、ぴっぴっと何か飛んできた。驚くなかれ、*つばきを吐きかけられたのだ。

係の人は B 大はにかみだ。自分の息子が失礼をやったみたいに恐縮し、かつあわてて彼を庇って云う。「どうも行儀がわるくてお恥かしい。でもね、あればかり責めないでやってください。はじめはあんなことしなかったんです。反映なんです……どうも云いにくいんですが、こうなるとあれのためにも云ってやりたいんでして。お客様からあさられたんで覚えたんです。つばき吐きかける人がいるんです。」「へえ！」

私はチンパにつばきされたのだが、それは*同胞から頂戴したつばき同然で、はなはだ心*たいいらかでない。

と、どうだろう。こんどはぼとぼと、じゃびじゃびだ。にわか雨のおしっこだ。おしっこというものは、なんという愛敬があるものだろう。一同ははは、へへへと笑った。笑う私たちをチンパは愁いある眼で見おろしている。同行のMさんはさっきのつばきに*辟易して、通路の壁面へ身を*すさらせていたが、おしっこで笑って何気なくふりむいて、ぎよつとした。ゴリラの顔と手がそこにあった。そこはゴリラ運動場で小窓が切ってあったのだ。チンパのおしっこを人が笑えば、笑っている後ろからゴリ公にまじまじと観察されている。M氏の後頭部は、ゴリラがもし髪の毛を掴む気なら掴める近さにあったのだ。武器を持たない一対一ではとてもかなわないことが身にしてみた。動物園は人間の弱さみたいなものを十分に思わせる場所である。

間もなく給食時間になった。動物園の台所へ行く。台所は裏門際の事務所に付属して、*類人猿舎とは別棟だ。*君子

は庖厨ほうちゆうに遠く住んでいるといったものだ。食事は云うまでもなく、いろんな点から考慮こうりよされているのだろうが、なかなか高級である。スープにコッペ、肉、野菜数種、果物いろいろ。スープは大ポタージュである。火を通した牛乳が台になっていて、卵黄らんおう・栄養剤えいようざい・果汁かじゅう・穀粉こくふんとおぼえきれないほどを合わせてどろりとできあがる。どんな味か舐めてみたいような気がする。洗ったり剥むいたり切ったりを男の人が迅速じんそくに器用にやっつてのける。こんなところにも経験の長さの結果が見えている。バナナ・葡萄ぶどう・林檎りんご・セロリ・小松菜など彩美いろどりしく、大ボールいっぱいを運ぶ。

猿さるたちは時間も知っているし、物音も鋭く捉とらえているから、通路のしきりをあけてやると、食事と知ってさつきと寝部屋ねべやへ入る。だが、見ているとその天井通路を通るとき、やはり手をつけて四ツ足よつあしで歩いて来るのが、いかにもわれわれと距離きょりがある。寝部屋はガラス張り・コンクリート・蛍光灯けいこうとう、清潔だ。食事を待つ表情、少しはしゃいでいる。係が哺乳壘ほにゅうびんにスープを入れて持って来る。ゴリラは長い手をのばして纏まとわる。係は壁かべを背にして床ゆかにあぐらをかく。彼は右手を係の頸くびへ巻きつけ、あぐらの上へ乗る。左手はあわれにやわらかく、係のシャツ釦ボタンなどをもてあそぶ。壘びんは係が支えていてやる。あの大きな口を一文字にしておっぱい壘びんくわ啣くわえ、ごくりごくりと、天井てんじようを見たり係の顔を見たり、ときにはわざわざ自分の手を眺めたり、あつちを見こつちを見飲むのである。おのずから人間の赤ん坊あかを想おもわせられる。ただし赤ん坊あかどころか、凄すごい背中せなかで凄すごい腕うでである。あれにぎゅっと力を入れられたら恐おそろしい。

* ゆえん……理由。

* つばき……つば。

* 同胞……仲間。ここでは自分と同じ人間のこと。

* たいらか……おだやか。

* 辟易へきえきして……たじろいで。

* すさらせて……後退させて。

* 君子くんしは庖厨ほうちゆうに遠く住んでいる……庖厨は調理場のこと。中国の古典を踏ふまえたたとえ。

飲んでしまっても係をかえしたからない。まどつていて離れない。遊び相手になつてもらいたいのだ。一日じゅう大勢のお客さんを前にしていても、彼にはそれらがただ過ぎ行く人なのであつて、* 暫時の対面でしかなく、縁の薄さをよく承知しているのだ。係のほうは彼の長年交際してきた友人である。食後もいっしょにいてもらいたい気もちは当然だろう。異郷に、好ましくない生活をして生きている彼である。観衆やコンクリートや新鮮ならざる果物などに、やむなく堪えている彼である。係に取纏つて放すまいとする、そのまっ黒な長い手はかなしい。心得て係は遊んでやる。しかし遊びも、しょせんはゴリラという高等にして凄まじい動物である。まだこのおすは四歳とか聞くが、見ていてだんだんにこわくなる。えらい纏わりようである。四本の手足がみな同じく利く。係に二本の手しかない感じで、差引二本の不足がいやにはつきりしている。それに力の相違である。多分彼は加減してやっているとおもふ。係を傷めて、感情？ を損じることはいけない、と知っているにちがいない。だが、しつこい。突き放されてはごろんところび、ころんだまま噛りつく。これでは飼育係はゴリラ相手に連続相撲をしているようなもので、えらい体力消耗だ。「からだは丈夫でないためですね」と云つていたのが思いだされた。

猿も人の眼を見つめるし、人も猿の眼を読みつつ、はらはらするような遊びに応じてやつて、係は室を出る。ゴリラはぶらんと手をさげ、しまったドアを見あげている。満足と残り惜しさが後ろ姿に出ていた。それから彼は、ひとりになった弾みで大いにあばれ遊んだ。C もんどりうつ、ひっくりかえる、掻きあがる、胸をたたく。ありとあらゆる腹ごなし的運動をやつた。

ゴリラのお隣のオランを覗く。彼ももう食事はなかば以上を済ませて、葡萄の房を翳して、一ト粒ずつよく見て吟味していた。比較のおとなしくたべているので、またゴリラへ戻ると、もう大のほうの排泄がしてあつた。間もなく係が来て、雑巾でそれを拭つた。名將は城攻のとき、兵のそれに注意して戦力の度を知るとか聞いたが、動物園では排泄物は重要な資料のようだ。これあるがためにずいぶん動物の健康保持には参考になる。うんちは臭いのみではない。

「ああしてふざけだすと、こわくありませんか。」「こわいなんて気が起きたときは、そばへ寄らないようにしています。人の気もちを敏感に悟りますからね。動物には絶対に平安と緊張がいります。すぐあれらは反応してきます。」

ある飼育のベテランがいて、その人はよくゴリラたちのところへ来て、指を一本出す。相当馴れた飼育係でもそんなことは恐ろしくてできない芸当だ。けれどもその人にかかると、*さしもの大猿たちもいつも大親密で、その一本指をそつと啣え、甘噛みなどまでする。大尊敬なのだ。あるときこのベテランは、何かまったく他のことで不機嫌になつて、むしゃくしゃしていた。そういうとき誰でも気を晴らそうとするものだ。気晴らしは気に入るものに頼ろうとするのが人情で、お膝もとは人間以上にわかるいい奴がたくさんいる。ぶらり園内を一ト巡りのつもりが、いちばん最初に当たったのが大猿たちのところだった。檻へ指を入れた。あつ！とも云えず万事休した。爪から先はなくなつてしまったのだ。ばぐんだった。大急ぎの手当が施されたが、指のさきは永久に失われた。恐ろしい話だが恐れのおあまり大きな猿を憎んではいけない、と云うのだ。人間同士で生じた鬱憤を胸に抱いて動物に対したのだ。人は動物をおこっているのではない。むしろ動物に慰めを求める親しい心があつた。だが、動物が直接に見るものは、その人の立腹の感情であつたのだらう、という。誰への立腹か彼等の関知するところでない、当然だ。立腹を持った人が突然そこへ立てば、彼等は咄嗟に、それは自分への立腹とうけとる。*戦きやすい彼等は急に目前に立腹を見せられて、いつものおなじみなんか吹き飛んでしまう。夢中でばくと歯が噛みあつてしまうんだらう。悪意ではなく恐怖であり、攻撃というより防禦だと思ふ、という。

ためらつたのち訊く。「そのなくしものは残っておりましたか。」「いや、なかつたようで。……だが誰も確かな証拠

* 暫時……少しの間。

* さしもの……さすのがの。

* 戦きやすい……「戦く」は恐ろしさなどで震えること。

を挙げたものはないのです。」

私は暴露のためや、単におもしろがりを書いていのではない。動物はまったく人とは異種のものであり、理解の届かないふしがたくさんあって、馴れもするし察しもつくが、いつもかならず不用意で相対してはいけない、ということが云いたいのだ。ベテランにしてこういうことがあるのだ。飼育係は学問のために飼育しているのではないけれど、飼育を手がけているうちに、学問を志す人と同じような態度も出てくるのに不思議はないのである。

これは、歩きつきまでがゴリラに似てきたと云われて、そうかなと頷いているほど、ゴリラを手がけ馴れてきた人の話である。ある日、閉園間近であった。まばらだがお客さんの姿はまだあちこちしていた。各飼育係は夕がたで用が多く忙しく働いていた。「ビルが逃げた！」と伝えられた。ビルとはゴリラの名である。そこいらにいる飼育係たちもぼかんとしている。信じられないのだ。新しいコンクリートの小屋ができて、ゴリチンたちはそちらへ移ったばかり、嚴重で頑丈な新居なのだ。

もつとも変んな気がしたのはその人である。自分の手でいまビルの檻の錠をさして来たばかりなのだ。「ビルが歩いている！」「お客さまのなかを旧類人猿舎のほうへ歩いてる！」と報告は矢つぎ早だ。もはやぼかんではない。急ぐ。

ビルはほんとに歩いていて、お客様のなかを！ だが、幸いなことにお客様は騒がないでいてくれた。お猿電車などで檻の外にいる猿を見なれているので、「散歩に出してある」と錯覚したのだ。勝手に出て来てしまったゴリラだと知ったら仰天だったろう。一大事は錯覚から生じた冷静で助ったのだ。知らぬが仏はお客さまだけで、知っている係たちは*戦慄である。その人は夢中だった。——「でも、一ト眼でビルの後ろ姿は淋しそうだと見えました。こっちも興奮してましたけど、かわいそうだ！ という気がしましたね。」

どうした弾みかで檻から出て、外へ歩きだしたものの、知った顔はなし、頼りなくてつまらなく、うろろしてしまつたのだらうと云う。私はここまで聴いたとき、檻に長く飼われた動物の、外へ出てみたもののその行きどころな

さを思いやって、そのあまりの淋しさに涙が出そうになった。

その人は「ビル！」と呼んだ。ビルはふりかえって、懐かしい人を見つけた。おそらく真っ黒けな手や顔でふりかえったのだらうけれど。……特有な声で、呼吸を刻んで喜び、その人へ手をつないで、何か云いかけられるかのように顔をふりむけふりむけ、○字形の二本足で歩いて住いへ無事に帰ったのである。

「あのとき園のほうじゃ、万一あばれだしたら、もうしようがないから撃ちまおうというんで、鉄砲を持ちだしていたんです。他の動物とちがってあれはどんなところでも登って越しちまいますからね。処置なしの状態になるんです。園としては動物中でも大切な動物であるビルを撃つというのは一大事なんです、お客様に危険なときにそんなこと云ってられません。ほんとにあの時はいかたかったなあ！ なんと云えない素直さで、手をつないで来たっけ。もしあばれたらそれこそ大変だ。」

それはどっちにとっても死闘だったかもしれないのである。お客がきやあと叫び、あるいは彼が銃口を見つけたら、あるいはその人がまず立腹したり恐怖したりしていたら、ビルは死闘を辞さなかつたろう。長年の飼育のなじみが花になって咲いたような話である。人と動物の間には理解しがたいいろいろもあるが、飼育係は動物の身になって考えてやれる人たちなのだ。そのゆえに、ビルの淋しさはずばりとわかつてもらえたのである。

(幸田文の文章による)

*戦慄……恐ろしさなどで震えること。

問一 二重傍線部A～Cの語句の本文中での意味として最もふさわしいものを、それぞれ(A)～(エ)から一つ選び、記号で答えなさい。

A 「たしなめられる」

- (ア) 気づかされる
- (イ) 注意を与えられる
- (ウ) 身の引き締まる
- (エ) 恥をかかされる

B 「大はにかみ」

- (ア) 大いにうろたえること
- (イ) 大にかしこまること
- (ウ) 大いにためらうこと
- (エ) 大いに恥ずかしがること

C 「もんどりうつ」

- (ア) 足踏みをする
- (イ) 行ったり来たりする
- (ウ) 手拍子をする
- (エ) 宙返りをする

問二 「それでいいのだし、自分の顔もたまには見てもらいたいなどと云う飼育係は、一人もいないのだけれど、私はそこところが大切なところだと思う」とあるが、

- (1) 「それ」とは何ですか。
- (2) 「私」が「そこところが大切なところだと思う」のはなぜですか。

問三 「飼育係の『と思う』は学問する人の態度をもって語られている」とあるが、どういふことですか。

問四 「私はチンパにつばきされたのだが、それは同胞から頂戴したつばき同然で、はなはだ心たいらかでない」とあるが、それはどういふことですか。

問五 「そのまっ黒な長い手はかなしい」とあるが、ゴリラの手を「私」が「かなしい」と感じる理由として最も**適当**でないものを一つ選び、記号で答えなさい。

- (ア) 人間の赤ん坊あかぼうを思わせる幼さを持ち、飼育係にとりすがっていること。
- (イ) 力の相違さういがあることで、飼育係からいつも恐れおそられていること。
- (ウ) 大勢の観客と会うが、一時的な出会いでしかなく、つながりが薄うすいこと。
- (エ) 故郷から遠く離はなれた地で生活をしていること。
- (オ) コンクリートや新鮮しんせんでない果物に囲まれた生活をしていること。

問六 「攻撃こうげきというより防禦ぼうえきよだと思おもう」とあるが、どういことですか。

問七 「そのゆえに、ビルの淋さびしさはずばりとわかってもらえたのである」とあるが、どういことですか。

二

次の各文のカタカナを漢字に直しなさい。

- ① ハチクハチクの勢いきい。
 - ② 出船いせのキテキキテキを聞きく。
 - ③ 陰かげであれこれとカクサクカクサクする。
 - ④ 毒性どくせいの強いゲキヤクゲキヤク。
-
- ⑤ 現場げんじょうのサイリヨウサイリヨウで判断はんぱんする。
 - ⑥ ダントウダントウで雪ゆきが少すくない。
 - ⑦ 新陳しんちんタイシヤタイシヤを促うながす。
 - ⑧ 目をコヤスコヤス。

以下余白